

氏名(本籍)	しんのとしかず 真野俊和(東京都)				
学位の種類	博士(文学)				
学位記番号	博乙第850号				
学位授与年月日	平成5年3月25日				
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当				
審査研究科	歴史・人類学研究科				
学位論文題目	日本の民俗宗教における遊行性の研究				
主査	筑波大学教授	文学博士	宮田	登	
副査	筑波大学教授	文学博士	武田	正	
副査	筑波大学教授	文学博士	牛島	巖	
副査	筑波大学教授	文学博士	大濱	徹也	
副査	筑波大学助教授		池上	良正	

## 論文の要旨

本論文は、日本の民俗宗教を遊行性の視角から考察することを目的としており、全体は序章と3部14章から構成されている。序章においては、日本の遊行宗教に関わる研究史を概観し、民俗宗教論のための理論的課題を整理した。そして仏教にみられる遊行への指向性と、地域社会の宗教における遊行という行動のもつ意義を大きな前提として、日本の民俗宗教を地域社会を通して分析する意図を述べている。

まず第1部「民俗宗教としての参詣と巡礼」においては、在家の民衆にとっての参詣、巡礼の意義を考えている。第1章「室町期における寺社参詣の様相」では、15世紀前半の京都やその周辺においては、旧来の経済的基盤を失った寺社を中心に娯楽的色彩の濃い寺社参詣が成立し、それが時代の文化的環境と深く関わっていたことを指摘している。第2章「講と霊場参詣」は、参詣講の主要な機能が成人儀礼であり、それを担う共同体が単独で完結し得ないことを例示する一方、講に見られる共同体の結合の原理の存在を指摘している。第3章「近代における旅と宗教」では、近世後期から近代初頭にかけての事例から、旅人に対する歓待、保護と拒絶・排除という相反する心情を浮彫させ、前者が後者にとって代わっていく状況を論じている。

第2部「巡礼行者と霊場伝説」では、巡礼を主に伝説や説話、霊験譚等を通して考察している。第1章「巡礼行者の宗教的達成」では、巡礼霊場の空間を、巡礼がどのように観念したのかを考え、とくに浄土観のイメージとして位置付けた。第2章「花山天皇と西国巡礼」は、西国霊場における花山天皇説話を素材としており、第3章「あこや御前の伝承と西国霊場縁起」では、西国霊場にお

けるあこや御前の伝説を素材とする。そして両章ともに巡礼習俗の形成に関わった職業的宗教者の影響が大きいことに注目している。

第四章「四国遍路の行者とその宗教活動」は、ある巡礼行者が説いた靈驗譚を素材とし、そこにこめられた意味を考察した。一般にこの種の靈驗譚は内容の不明瞭さのため軽視されがちであるが、宗教者自身の行動と対照させることによって、解読できる可能性があるという前提に立っている。

第3部「民俗宗教としての遊行性－遊行漂泊と定住の接点－」では、遊行漂泊と定住とが交わる場面で民俗宗教がどのように表出するのか問題にしている。第1章「冥界への遊行と救済」では、冥界に入っていく聖たちの想像上の旅を通して、地獄の恐怖を救済にどのように結びつけたのか考察した。第2章「近世遊行聖の諸相」の聖たちの存在は、近世仏教のなかでは、低い評価しかされていないが、現代社会における実態をみる限りでは、村落の講や巡礼習俗などに著しく貢献していることが明らかにできると述べている。

第3章「遊行漂泊民の奉じる神－木地屋と鋳物師－」では、木地屋と鋳物師たちの職能縁起について考察し、かれらが定住民と対立する心意をもつことに留意しながら、両者の結合によって日本文化の全体像が浮かんでくると論じている。第4章「山の法師と里の勧進」では、山の法師と里の民の文化交流を、里への勧進習俗を通して考察し、山と里の間の親和的かつ拒絶的關係に注目した。とりわけ、中世の山岳寺院が在地支配に及ぶとき、交易の中心になる港湾都市に顕在化する点を明らかにしている。第5章「外者歓待の行為と心意」では、前章とは視点をかえて、一般的な村落と旅人との関わりについて論じている。第6章「異人伝承と崇り」は、訪れてくる旅人の神話性を、異人からみた認識論としてとらえて、折口信夫のマレイト論を含めて他界の空間をいかに必要とするのかを論じている。

終章においては、これまでの本論文の論点を整理し、とくに主要対象であった聖なる宗教者をめぐり、筆者の見解を集約した。端的にいうと、教団と信者との間を橋渡しする聖が民俗宗教のもっとも具体的宗教的な関係を表現する存在になるという結論を導きだしている。

## 審 査 の 要 旨

本論文は、民俗宗教論のなかの主要なテーマである遊行性に焦点を定め、中世から近現代に至る時間軸のなかで、通時的に表現される聖の特性を究明したスケールの大きな研究であり、これまでの研究史を一層高めた内容として評価される。まず第一は、遊行性をとらえるにあたって、たんに漂泊を外在的にみるだけでなく、定住者たちの内在的な世界認識の対象として把握できる視点を確立させたこと。第二は、民俗学的な資料だけでは再構成できないことから、幅広く文献に目配りし、歴史学との接域に課題を設定したこと。第三に、この課題を民間信仰の次元でなく、民俗宗教の枠組みに広げて論ずることにより、教団と信者の媒介項としての聖の位置付けが解明されたことである。

しかし、筆者の主旨はともかく、なお若干不備な点も見受けられる。その第一は、全体の構成上、

中心となる2部に比して、3部の論旨がやや分散する傾向があり、説得性に欠けたこと。第二は、文献資料に関して、やや恣意的にもちいられていること。とくに地域社会とのつながりを分析する際に、明治以後の宗教法令を多用すると土佐遍路の実態はさらに深まったものと思われる。第三は、中・近世の時代性の枠組みが、こうした民俗宗教現象をとらえる際に有効であるかどうかの疑念もある。時代性との関連については、一考の要があるように思われる。

とはいうものの、本論文が民俗学の研究史における空白部を埋めたことは明らかであり今後さらに具体的なフィールドワークが積み重ねられていくことによって、学界に新たな知見を提示していく存在として十分評価され得る内容である。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。